

仮想空間

風参

昼間は少し賑やかな街中にそのガレージがあった。

ネイビー色のドーム型ガレージは街中でに異彩を放っているようでしっくりとなじんでいたが、そのガレージさえ夜の闇に紛れてしまうと、辺りは一気に静かになった。

そんなガレージの横を加藤真衣は今から通り過ぎようとしていた。

少し肌寒く、追い討ちをかけるように風が真衣の頬を撫でると思わず立ち止まった。

金属音がかすかに聞こえてくる。

その金属音はガレージからのようで、真衣は引き込まれるように向かっていた。

灯りが煌々と照らされている中にはいると、雑然としているようでキッチリと収められた空間が目の前に広がる。

それはいつもと変わらない光景でなぜか真衣は安心した。

いつから来るようになったのかはわからない。しかしいるだけで落ち着くこの空間が好きだった。

そして奥のデスクでは一人の男が黙々と作業をしていた。

「ハカセ」

真衣に呼ばれると男はゴーグルを上げた。

三十代ほどに見えるこの男は黒髪のロングをまとめ、紺色のツナギにデニム地のエプロンをつけていた。

本当の名前はわからない。ただハカセと呼ばれるこの男はどんな機械でも直し、さらに面倒見もいたため周りから慕われていた。

今も子ども達から預かったおもちゃを治しているところだった。